

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2013年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定研究プロジェクトの進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所では、「アジアにおける公共社会論の構想」を基本理念として研究活動を展開している。2012年度から三つの相補的プロジェクトとして「日本班」、「南アジア／インド班」、「中国国境域／雲南班」を定め、それぞれ個別の地域において共同研究を実施して、「包摂」と「排除」の二元論を超える社会調査に取り組んできた。以下、各プロジェクトの進捗状況報告を掲載する。なお、報告は2013年度8月時点のものである。

◆ 「南アジア／インド班」プロジェクト

代表：関根 康正（関西学院大学社会学部教授）

南アジア／インド班は、現代南アジア社会における「排除」と「包摂」をめぐる多様で複雑な諸相をフィールドワークと文献に基づき実証的かつ理論的に考察する作業を継続している。2013年度前半（4月～9月）は、班員による海外フィールドワーク2回、班主催定期研究会を1回開催した。

〈班員によるフィールドワーク〉

鳥羽 美鈴 2013年7月22日～8月4日 アメリカ

関根 康正 2013年7月28日～9月2日 イギリス

鳥羽はアメリカで活躍するインド系文学者に関するデータ収集を実施し、関根はイギリス・ロンドンにて南アジア系移民の宗教空間建設に関するミクロのフィールドワークを実施している。なお、本年度後半には鈴木、中川がそれぞれスリランカ、ネパールで現地調査を行う予定である。

〈班主催定期研究会〉

第4回「舞台の上の難民－芸能集団の実践から見るチベット難民社会の排除と包摂」

講師・山本達也氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、日本学術振興会特別研究員 PD）、司会・鈴木慎一郎、2013年6月21日（金）、於：先端社会研究所セミナールーム

講師の山本達也氏より、チベット亡命政府が運営する芸能集団の活動と1959年以来醸成されてきたナショナリズムが孕む排除と包摂をめぐる状況について、詳細な現地報告と分析が提示され、研究会参加者との間で積極的な討論が行われた。

〈南アジア／インド班共同研究会〉

第5回南アジア／インド班共同研究会（2013年5月8日（水）、於：第一教授館ラボ3）

第5回の班共同研究会では、2013年度の班員調査計画および定期研究会の企画等のプロジェクト運営に関する打ち合わせを実施した。また、昨年度当班が主催した計3回の定期研究会の報告と討論の内容をまとめて公表していくことが決定された。これについては本紀要の場を借りて次号より順次掲載していく方向で調整を行っている。

◆「中国国境域／雲南班」プロジェクト

代表：荻野 昌弘（関西学院大学社会学部教授）

「中国国境域／雲南班」は、中国国境域に位置する雲南省において、市場経済の浸透に伴う少数民族の文化的変容と民族間関係の変化に見られる「排除」と「包摂」をめぐる実証研究に取り組んでいる。2013年度上半期の研究活動は、主に2013年8月21-22日に中国昆明で開催された国際会議「International Conference on the Anthropology of Disaster and Disaster Mitigation and Prevention Studies」への参加と、8月23-29日まで行った昆明と新平イ族タイ族自治県の県域における現地調査がある。

〈学会参加報告〉

本国際会議は、「中国国境域／雲南」班と雲南社会科学院の合同研究会における荻野昌弘の発表「災害の比較社会学研究試論」やその後の議論に端を発するものである。この発表において荻野は、阪神淡路大震災や東日本大震災など日本における災害復興の事例と、雲南社会科学院の李永祥による雲南省新平県における災害復興の事例を併せて検討し、災害に関する比較社会学的研究の重要性について論じた。それを受けて今回は、日本や雲南省の事例のみでなく、中国各地から様々な災害研究に従事してきた研究者、そしてアメリカからもスザンナ・ホフマンやアンソニー・オリヴァー＝スミスなど著名な災害人類学者が招かれることとなった。

当日は、「災害人類学、および防災・減災の理論と実践」が会議のテーマとして掲げられ、雲南省社会科学院と中国社会科学院民族学・人類学研究所『民族研究』編集部の共催という形式がとられた。また、実際の運営は雲南省社会科学院災害研究センターによって担われ、開幕式の後、5名の著名な災害研究者による基調講演、8部会・42本の研究発表、最後に総合討論および閉幕式が行われた。また国外や省外からの参加者は、最終日にエクスカージョンとして、少数民族イ族の石林県長湖着底村を訪れた。

基調講演において、荻野は“Towards a Comparative Sociology of Disaster”というテーマで、災害がいかにして社会学の重要な研究対象となるのかについて論じた。社会学が災害研究において対象とすべきものは、「潜在的な災害リスク」と「災害がもたらす社会変動」の二つに分けることができる。この二点について、雲南省新平県の土石流災害、阪神淡路大震災、東日本大震災についてそれぞれ考察し、「社会的老い」、「死の物象化」、「忘却から記憶」といった観点から、現代社会における災害の意味について比較社会学的な分析を行った。

社会学研究科研究員の濱田武士は、荻野が司会を務める部会“Overseas Anthropological Studies of Disaster”において、“A process of becoming cultural heritage and succeeding memories”と題し、1990年代以降の広島原爆ドームの世界遺産化のプロセスに焦点を当て、文化遺産と記憶の継承について考察した。戦争災害の記憶の保存への取り組みも、近代における様々な災害のそれと共通点があり、記憶の継承の実践は、次世代に災害の実態を伝えることを課題としている。濱田は、原爆ドームの世界遺産化プロセスに着目し、遺産化の過程に関わり合いをもつアクターと継承された戦争災害の記憶がいかに接合されているのか、あるいは緊張関係が存在しているのかを論じた。

同じく社会学研究科研究員の村島健司は、「灾后重建与宗教観念」(災害復興と宗教観念)という部会において、「宗教團體の災後重建活動與其正當性－以台灣佛教慈善團體投入的兩種災後重建為例」というテーマで、台湾の宗教団体による災害復興への取り組みについて報告を行った。台湾では国家ではなく宗教団体が災害復興において中心的な役割を果たしており、日本や中国とは異なる災害復興モデルが存在する。しかし、2009年に発生した八八水害後の災害復興では、先住民族を中心とした多くの被災者が宗教団体を中心とした復興モデルを拒絶した。村島は、被災者による反応を通じて、コンフリクトが生み出される過程を明らかにし、災害復興の正当性について論じた。

本年は2008年に発生した四川大地震の五周年にあたり、本国際会議はその間に培われた災害人類学の新たな展開や研究成果を振り返り、災害研究における理論と方法を改めて探究することが目指された。雲南省や四川省が位置する中国南西部は、地震や水害など災害多発地域であり、また、漢族だけでなく様々な少数民族が暮らす地域である。こうした地域において、人類学的フィールドワークを通じて災害研究に従事している現地研究者とのあいだで議論を交わすことができたことは、今後も「中国国境域／雲南」班が雲南省新平県で調査を継続し、研究成果を公表していくにあたって、非常に有意義な機会であったと考えることができる。

〈現地調査報告〉

現地調査は、新平イ族タイ族自治県の「県城」(県政府所在地)を対象に調査を行った。

(1) 新平県の「県城」調査は、大きく二つに分けられる。一つは、主に「古城老街」、「清真寺」、「龍泉寺」、「桂山大廟」などの文化財保護の対象を、もう一つは、「民族広場」や「新平大道」などの新しい文化「創造」が反映された都市建設のあり方を考察した。

「古城老街」にある県級文化財に指定された「中街53号」は、新平等5県を統治していた土司である李潤之(漢族)の邸宅の一つで、1930年に建てられた近現代の典型的な建築物として保存対象になっている。「清真寺」は、清乾隆58年(1793年)に建てられた市級文化財に指定されている。回族の信仰と文化を色濃く表す寺院であり、1901年に清朝の光緒帝と慈禧太后の直筆の額を賜ったほどの存在である。老街にわずかに残っている民家や佛教寺院の「龍泉寺」、「桂山大廟」のいずれもこの「県城」が漢族と回族の文化によって形成されていたことを示している。

一方で、2008年に建設された「民族広場」は、周囲に12本の直径1.5m、高さ9mの柱が設置され、柱に四頭の虎の彫刻などを施し、イ族の文化を表象している。「新平大道」に沿って流れる平甸河の両岸には、2009年に完成した「イ族の文化長廊」と呼ばれるプロムナードが設置されている。全長4850mに渡って大理石の彫刻が施され、また、一定間隔の石碑が建てられ、彫刻や石



開会式の様子



班員による報告 (1)



班員による報告 (2)



班員による報告 (3)



調査の様子 (1)



調査の様子 (2)

碑にはイ族の歴史や文字および文化が反映されている。

このように現在、新平の「県城」は少数民族の「民族風情」を資源として観光開発を行い、漢族と回族に由来する伝統文化の町に、イ族の文化を「移植」しているのである。

この調査結果は、今後班員による考察・分析の補足を経て、「辺境から問うグローバリゼーション——中国雲南省新平県から見る世界（1）」として『先端研紀要』に論文発表が予定されている。

◆「日本班」プロジェクト

代表：島村 恭則（関西学院大学社会学部教授）

日本班の目的は、アジアを中心とした諸外国や日本列島の周縁地域出身の人々が、その出自にとまなう文化やネットワークを資源として、価値転換をおこなうさまや、移動民の集住地域、新旧住民の混住地域における力関係の逆転などを捉えることにある。2013年は、各自の質的調査および文献資料調査を積み重ねていき、従来の「排除／包摂」といった二項対立的な枠組みからは抜け落ちてきた諸現象や人々の実践領域を明らかにしていくうえでの共同研究の基盤を構築することを目指した。その進捗状況および成果に関しては、日本班研究会を通じてメンバー間で共有するとともに学内外に発信された。以下が、各自の進捗状況およびその成果が報告された著書、論文、口頭発表等と日本班研究会の概要（今年度の予定含む）となる。

■進捗状況

島村恭則：広島市中区元安川のかき船2艘を対象に、戦後復興・都市開発と河川占用、移動に関する実態調査を実施した。また、広島市中区基町アパートにおいて清掃員ガタロ氏（self-taught artist）よりライフヒストリーを聴取。さらに、富山市において戦後復興期の人の移動と闇市の消長に関する実態調査を実施した。以下が、この間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・島村恭則編著『引揚者の戦後』新曜社、2013年8月（編著）。
- ・島村恭則「フォークロア研究とライフストーリー」『人びとの生と語り』山田富秋・好井裕明編、せりか書房、近刊（共著）。

〈論文〉

- ・島村恭則「熊本・河原町『国際繊維街』の社会史——闇市から問屋街、そしてアートの街へ——」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第9号、2013年3月。

〈口頭発表〉

- ・島村恭則「フォークロア研究（folkloristics）とは何か——『民俗学』を再定義する——」第65回日本民俗学会年会（10月13日、新潟大学）。

金明秀：2013年度第1回日本班研究会にて、2012年度に実施した「日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査」のデータから、現代日本社会における排外主義の現状を考察に関する報告を行った。同調査は、3種類の都市（①外国人集住都市会議の会員都市、③宮城県石巻

市、③西宮市)の選挙人名簿を母集団としたものである。従来の「排除／包摂」といった二項対立的な枠組みを乗り越えていくにあたり、まず現代日本社会における排除とは何かを明確にしていくことを試みた。また、“Les caractéristiques de la xénophobie au Japon” (日本における排外主義の特性)と題した論文がフランスの移民問題専門誌 *Hommes et migrations* 4~6月号に掲載された。なお、以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈論文〉

- ・ Kim, Myungsoo, “Les caractéristiques de la xénophobie au Japon”, *Hommes et migrations*, avril-mai-juin, 2013.

〈口頭発表〉

- ・ 金明秀「現代日本社会における排外主義——日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査から」2013年度第2回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第1回、2013年7月。

山口寛：集団就職と呼ばれた大規模な労働力移動現象の実態を解明するため、資料収集を進めている。たとえば2013年8月には秋田県立図書館、秋田県労働局において資料収集をおこなった。すでに戦時体制下において広域職業紹介制度、集団赴任制度といった関連諸制度がかなりの程度整備されていたことが明らかになった。こうした新たな資料収集とともに、これまで各地で収集してきた集団就職関連資料の整理も進めている。以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・ 『よくわかる都市社会学』 ミネルヴァ書房、2013年（共著）。
- ・ 『フィールドは問う——越境するアジア——』 関西学院大学出版会、2013年（共著）。

〈論文〉

- ・ 「都市のダイナミズムと都市景観行政——尼崎市の寺町都市美形成地区を中心に——」人文論究 63-1、2013年。

〈講演〉

- ・ 「集団就職と県人会——高度経済成長期の若年労働力移動——」労働政策研究・研修機構、2013年3月。

難波功士：日本映画（およびテレビドラマ）における在日コリアンの表象について、関連文献や該当作品を収集・閲覧する作業を継続中である。戦後長らく、啓蒙・啓発の文脈、もしくはアウトローのものにしか表象の例を見なかったが、1992年のテレビドラマ「1970ぼくたちの青春」、1993年の映画「月はどっちに出ている」あたりを契機に、一気に表現の多様化が進んできている。現在、そうした流れと2000年代の韓流ないしK-POPブームとの関連を中心に調べている。

山泰幸：済州島出身の在日コリアンの社会的成功者の研究調査を継続して行っている。各種の伝記的資料の収集とともにインタビュー調査を実施した。

川端浩平：非集住的な環境で生活する在日コリアンの帰属意識の変容に関するフィールド調査（岡山県岡山市、倉敷市）を引き続き実施した。以下がこの間の研究成果の報告となる。

〈著書〉

- ・『フィールドは問う——越境するアジア』関西学院大学出版会、2013年（共著）。
- ・『ジモトを歩く——身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房、2013年（単著）。
- ・『〈ハーフ〉が照らし出す人種混淆の文化政治』（仮）青弓社、2013年（9月刊行予定）（共著）。

■日本班研究会

- ・2012年度第9回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第4回

日時：2013年2月28日（木）15:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

報告者：松田有紀子氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

コメンテーター：荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）

報告題目：「『女の町』の民族誌——花街・祇園町に関する女性史学的研究」

- ・2013年度第2回先端社会研究所定期研究会 共同研究「日本班」研究会第1回

報告者：金明秀（関西学院大学社会学部教授）

日時：2013年7月5日（木）15:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

報告題目：「現代日本社会における排外主義——日本のグローバル化と市民の政治参加に関する意識調査から」

なお、2013年11月29日（金）に共同研究「日本班」研究会第2回を実施し、日本社会における内なる潜在的多様性の研究を行われている岡本雅享氏（福岡県立大学人間社会学部公共社会学科・准教授）に報告していただく予定である。